

後世、大スターとなった
服部半蔵は二代目

昭和50年代半ば、「服部半蔵影の軍団」というテレビ時代劇で千葉真一扮する半蔵の立ち回りのカッコよさを、子供ながらゾクゾクしながら毎週楽しみに観ていたことを覚えてる。

「服部半蔵」はその後、クウエンティン・タランティノー監督の大ヒット映画『キル・ビル』（03年公開）にも登場。同監督が「影の軍団」シリーズの大ファンだったこともあり、千葉にオファー、それに応える形で、千葉半蔵が20数年ぶりでスクリーンに蘇ったというわけである。

さて、日本の忍者は数知れず。だが、前述したとおり、世界にその名を知られる忍者といえば服部半蔵を置いてほかにはないだろう。

初代の服部半蔵保長は伊賀国の土豪で、北部を領する千賀地氏一門の長だった。当時の伊賀は合議制で、上忍の「千賀地」「百地」「藤林」の三家が指導的役割を担っていた。だが、狭い土地で三家が暮らすにはたつきも厳しく、結果、保長は上洛。服部を名乗り室町幕府12代將軍・足利義晴に仕えることとなった。

だが、それは長くは続かなかった。室町幕府に見切りをつけた保長は、三河の松平清康に支えたが、戦乱で主を失い、故郷の伊賀に帰ることを余儀なくされる。徳川家康は、そんな松平清康の孫だった。つまり、服部家と徳川家との間には、遡った時代から浅からぬ縁があったというわけだ。

といっても、服部半蔵が忍者だったのは初代の保長だけで、二代目以降は武士だった。

だが、それは長くは続かなかった。室町幕府に見切りをつけた保長は、三河の松平清康に支えたが、戦乱で主を失い、故郷の伊賀に帰ることを余儀なくされる。徳川家康は、そんな松平清康の孫だった。つまり、服部家と徳川家との間には、遡った時代から浅からぬ縁があったというわけだ。

墓が語る

一大事

専称山西念寺

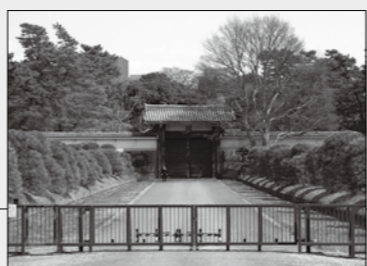
服部半蔵

服部半蔵、と言えば「忍者」の代表とされている。だが、実際の半蔵正成は、いわゆる忍者ではなかった。

「鬼の半蔵」と呼ばれ、徳川十六将の剛の者。武功により家康から持槍を賜り、江戸入封後には八千石を拝領したほどだ。

ただ、実父・半蔵保長が伊賀出身だったこと、徳川氏に召し抱えられた

伊賀衆、甲賀衆を統率した。彼らは忍者集団である。それほどの名門、服部氏も正成の長男・正就が部下への非道酷使により伊賀衆から反発されて失脚。兄に代わった次弟・正重も岳父の大久保長安に私曲が発覚。正重は連座して、三河以来の服部氏は改易となったのだった。



半蔵の名に因んだ半蔵門。

保長の四男として三河国伊賀（現愛知県岡崎市伊賀町）に生まれた。正成は幼いころから父の後姿を見てきたこともあり、武芸の才能に秀でていた。彼は父保長の逝去後、服部家の家督を継ぎ徳川家康に仕えると、わずか16歳で三河宇土城を夜襲。また、元龜3年12月22日（1573年1月25日）の「三方ヶ原の戦い」では徳川軍は大敗を期すものの、武功の褒美として、なんと伊賀衆150人を預けられたといわれるから、その仕事ぶりは突出していたようだ。正成にとって徳川家との関係を決定づける一大事が起こったのは、天正10年（1582）6月のこと。それが明智光秀によるクーデター、「本能寺の変」だった。家康はこのとき、信長の招きを受けて安土城を訪問、堺の街を見物したり、茶会などを楽しみ、京都へ戻る途中だった。なにせプライベートの招待旅行である。そのため、家康が連れていた家臣はわずか30数名の供回りだけだった。そんな家康一行を明智光秀が見逃すはずはない。街道には明智軍の包

囲網が敷かれ、見つければ、もちろん命はない。家康最大の危機である。しかも供を務めるのは酒井忠次や石川数正ほか、本多忠勝、井伊直政、榊原康政、高木広正といった徳川家の重鎮ばかり。もし襲撃され全員刺殺となれば、徳川家は壊滅的痛手を受けることは必至だった。とはいえ、多勢に無勢。とてもではないが、一点突破などできょうはあらずもない。自決を覚悟する家康。だが、本多忠勝はなんとしてもこの危機を打開し、家康を本国に戻すことを決意。そこで白羽の矢が立ったの

抜け忍、五右衛門か？

半蔵様、

ご冗談を！

まあよい、どうじゃ

太閤を弑でさぬか？

日本一の大盗人……!?!

おもしろえ

太閤を大盗人とは、

言い得て妙じゃのう



が、伊賀に所縁のある正成だった。正成は一向に先んじて、明智軍の追っ手をかわし、さらには地元の土豪たちの襲撃を避けながら、甲賀・伊賀国境の多羅尾峠を越えて伊賀地に入った。そして、甲賀・伊賀の忍者300人余りを召集すると、伊勢まで家康の一行を警護、白子（鈴鹿市）の港から船で伊勢湾を渡ると、家康を無事岡崎城に帰すことに成功したのである。

この脱出劇が、世に言われる「神君伊賀越え」だった。もちろん、成功の裏には正成と甲賀・伊賀忍者との揺るぎない信頼と強固なネットワークがあったことは言うまでもない。つまり「神君伊賀越え」は正成でなければなしえなかった、一大事だったのである。この功績により正成は家康から八千石を与えられ、与力三十騎・伊賀同心二百人の支配を許されることになった。

また、本能寺の変により空白地帯となった旧武田領を巡る「天正壬午の乱」が勃発。正成も家康に従い甲斐へ出陣。伊賀衆を率いた正成は金

刀比羅山砦ほか、数か所に布陣を敷き、甲斐と駿河を結ぶ中道往還を監視したのである。

服部半蔵は忍者ではなく
武功赫赫たる士だった

一般的に「服部半蔵」として有名なのは、戦国時代から安土桃山時代にかけて三河で活躍した二代目の服部半蔵正成。彼は松平氏（徳川氏）の譜代家臣で徳川十六神将にも数えられる「鬼半蔵」と異名を取る武將で、伊賀衆（伊賀同心組）と甲賀衆を指揮していた。

正成は天文11年（1542）、服部

さらに「小牧・長久手の戦い」では、伊賀甲賀者百人を指揮し鉄砲隊を編成。豊臣方を撃退。天正18年（1590）の小田原征伐でも家康に従軍し、その功績により遠江に八千石を知行したといわれる。

かくして、数々の功績を残したのち、服部半蔵正成が天寿を全うしたのは慶長元年（1596）11月4日のことだった。その亡骸は、正成が創建した江戸麹町清水谷の安養院に葬られた。安養院は、徳川家康が江戸に入封して間もない文禄3年（1594）、正成が創建した庵である。

正成は生前に家康の長男・信康の守役を務めたが、信長により切腹を強いられ、非業の死を遂げた信康の菩提を弔うために出家入道となって西念と号し、庵に供養塔を建てた。同庵は江戸拡張のため、寛永11年（1634）に正成の法名に因む西念寺と寺名して、現在の東京都新宿区若葉町に移転したとされている。よく知られる江戸城半蔵門は、半



はっとりはんぞうまさなり●天文11年（1542）～慶長元年11月4日（1596年12月23日）。伊賀国土豪、千賀地氏一門の長（異説あり）。服部半蔵保長の4男として生まれる。父の死後、徳川家康に仕え、掛川城・姉川・三方ヶ原の戦いなどで武功を揚げる。徳川三河以来の旧臣で「鬼の半蔵」の異名を持ち、「徳川十六将」の1人。上ノ郷城夜襲で戦功を立て、家康から持槍を拝領。この槍は西念寺本堂に保管され、戦国期の槍として貴重な資料となっている。慶長元年（1596）11月、55歳で死去。

西念寺に祀られた服部半蔵正成の墓。

蔵の屋敷が門前にあったことから名づけられた。甲州街道はこの半蔵門を起点として始まるが、非常事態の際、將軍が江戸を脱出するための要路になっていたのだとか。そのため、この街道だけが唯一、江戸城に直結するように造られた。將軍の緊急事態には影のように寄り添い安全かつ、迅速に本丸から脱出させる――。服部家の使命は、上様を守護する役。つまり、その嚆矢である「神君伊賀越え」は正成の運命を左右しただけでなく、その後の服部家の立ち位置をも決定づける一大事となった、というわけである。